

WAY プロジェクト(校内道德教育推進委員会)レポート・13

2019・12/19(木)

今回のWAYプロジェクトは、石本先生のこんなお話から始まりました。「国語で、森鷗外の高瀬舟を学習している時に、一人の生徒が『哲学だねえ』と言ったんです。生徒から『哲学だねえ』という言葉が出るくらいだから、うちの学校で今哲学がテーマになっていて、教員でやっているということを生徒達も知っているくらい浸透しかけています。」ますますしっかりと取り組んでいかなければならないと感じたこのお話から、スタートしていきました。

今回のWAYプロジェクトには、午前中に全校生徒にご講演くださった角岡伸彦さんをはじめ、レギュラーメンバー並みに遠い距離を大学での授業を終えてから手弁当で来てくださっている大阪市立大学の土屋貴志さん、岡山県から是非参加したいと来られた論語を研究されている就美短期大学の小谷彰吾さん、道德の教科書を担当されている東京書籍の山内貴詞さん、本校卒業生で現在高校に通っている島田桃香さん、昨年度まで本校で教頭をされ今年度から市の教育委員会で勤務されている中嶋憲作さんなど、総勢24名という多くの方がご参加くださいました。(角岡さんのご講演に関しましては、生き方科のページをご覧ください。)

内容項目 C-17「我が国の伝統と文化の尊重、国を愛する態度」について議論が繰り広げられました。

C17「我が国の伝統と文化の尊重、国を愛する態度」

優れた伝統の継承と新しい文化の創造に貢献するとともに、日本人としての自覚をもって国を愛し、国家及び社会の形成者として、その発展に努めること。

前回に引き続き、C-17に取り組んだのは、仲川さんの次のような引っ掛かりからでした。

「前回、C-17について話させてもらったんですけども、どこまでがどう『我が国』なのかという疑問を持っていたんです。というのも、子どもらが勉強していく中で、場所的に身近にして、ふるさととして考えていくのはどうなのかなと思って。」

この出していただいた引っ掛かり、疑問を元に、議論が進んでいきました。

まず出てきたのが、C-16が郷土がテーマになっているので、17が国で、18が国際理解(世界)という、足元からどんどん広がっていったイメージなのかなという意見でした。

山内さんからは、「周りを巻き込んで何かを成し遂げようとする態度が大事で、自分の周りにある世界、郷土(地元)であり、国であり、世界であり、規模にかかわらず共通する事だと思います。」というお話が出されました。

土屋さんからは、16と17と18に関して次のような考えが出されました。

「大阪には在日の方がたくさんおられるし、飛鳥文化は渡来人文化だし、つまり、郷土を見ていくと、17や18につながるものがあり、なおかつ日本国だけじゃなくて様々な国の文化を取り入れて郷土の文化ができているということを学ぶことができる。だから、授業ではそれらを自覚できる授業がいいと思っている。」

角岡さんも、初めてとは思えない自然な感じで議論に切り込んでくださいます。

「僕が引っかかるのは『日本人ってなんやねん?』というところです。日本人という境界は、国土や領土のようにはっきりしていないものじゃないかなと思っています。僕は物書きなので、『日本人として』とかは絶対に書かないです。『日本人として生まれて』とか書くと、読者の中でも当然外国人もおられるし、いろんな立場の方がおられるので、僕は絶対に書かない。根本的に『日本人を育てる』ってのは、どうやねんって話ですね。日本人って色々やろと思います。引っ掛かりがある。」

角岡さんの話を受けて、松田さんからは僕も教室で「私たち日本人は」とは絶対言わないし、どんな立場の、どんな思いの人がいるかは完全にはわからないから、日本人しかいないという決めつけで言うような事は、教師はしてはいけないと思うという考えが出されました。

さらに、自分の無自覚を自覚したという話が、角岡さんから出されました。ある場面で、「写真を撮るから日本人集合して」と声をかけられた際に何も考えずに自分も集まっていたけれど、その中に在日の人が出たことに後から気がついたというお話でした。

2年生で在日の学習を進めてこられた高砂さんからも、日本国籍を持っている人だけが日本人なのかという問題意識が出されました。

論語と道德教育を繋げていくという問題意識をもっておられる小谷さんからは、「道德は共に生きるや、より良く生きるというキーワードの大前提があって、そのためには誇りを持ち、その事によって多くの生徒達のスイッチが入るという前提があり、誇りを持つ事によって他者に対する尊重が生まれ、他者の誇りも尊重し、それによって共同体意識が保たれるということから、このような配列になっていると思う。だから先ほどもったが、価値観を押し付けるということではなく、他者を尊重するからこそ考え議論する道德になった。互いの意見を折衷したり、折り合いをつけたりするのではなく、新しいシナジーを生み出す議論が求められているのが新しい道德であり、これからの考え方だと思う。そのためには、まず知る

ということが重要で、知るからこそ誇りが生まれる。自分が住んでいる所に誇りを持つために、自分が住んでいる所を知る。そこには日本人や外国人という事は関係なく、故郷や国などの文言が並んでいるのではないかと思う。」とありました。

「誇りというと排他的になりがちなので、注意をしなければならないと感じている。」

「排他的な誇りは、真の誇りではない。」

「真の誇りってなんなのだろう。」

いつも通り「それって何なんやろう？」という哲学的な思考が始まっていきました。

また、高校生の島田さんからは、この話の流れから、「もうすぐ選挙権を得るがわからないことが多すぎて不安が大きい。国を愛する態度や、郷土を愛する態度が大事なのはわかっているが、わたしを含めたみんなの意識が低いのではないかと思う。だから、漠然としているように聞こえるし、これは何なのだろうとしか思えないです。」とありました。

PTA 会長の石口さんは、「僕も若い頃は、僕一人だけ投票しても変わらんやろと思っていた。でも、一人の思いがないと変わらないっていうのも実際あるので、そこは自分で勉強して、どういう国を作っていきたいかという理想を持って自分で選ぶということかと思う。」というメッセージを投げかけられました。

今回は本当に多様な方々が参加してくださったのもあり、様々な考えや意見が出され、議論がいつも以上に白熱していました。わたしも議論に参加している中で、自分が生まれた故郷や、今住んでいる地域、自分が所属している場所や、自分の周りにいる人々や、身の回りのことに関心を持ち、知り、どう向き合っていくかを考えて、関わっていく必要があるのではないかと思います。

(文責:松浦)

